

血液病レジデントマニュアル 第4版

神田 善伸

南多摩病院総合内科・膠原病内科部長

國松 淳和

なぜこのような専門外の本を
私が必要とするのか

素晴らしい書籍がまた改訂された。私は総合内科、あるいは地域医療としてのリウマチ・膠原病診療をしているのであって、血液内科の専門診療をしているわけではない。が、じつは初版から今回まで毎版購入している。いってしまえば熱心な本書の読者である。

さて、専修医でも専門医でもない私がなぜこのような専門外の本を必要とするのか。当たり前だが、知識をアップデートするためである。そこで、本書を読むなどして最近の血液学の臨床について気付いたことが2つあってそれについて述べる。

1つは、新規治療が増えたということはもちろんだが、血液病の治療として「内服薬」が明らかに増えたという点である。血液病の治療といえどとにかく入院して何本かの点滴を次々にやっていくイメージを持ってしまうが、非常にスマートな治療薬が増えてきた。外来で治療をすることの重要性、必要性はおそらく確実に高まってきていて、この点内科医にとって外来力のビルドは急務になってきている。私の場合は不明熱診療がそうで、病名なしに「とりあえず入院精査」のようにはしにくい医療制度になってきている。できる限り入院せずに解決するような外来力が望まれていることを日々感じる。

もう1つは、“地域医療 in hematology”とでもいおうか、すなわち、血液病の治療を高次機関で厳密に完璧にやるという考えとは対比的に、無治療で緩和のみというのではないものの、無理して完全寛解をめざすのではなく、生存がそれなりに延び、遠くの高次機関に通院するのではなく自宅近くの相対的に小さく機能の低い医療機関でも

実施できるような治療選択肢が増えてきた印象を抱いた点である。内服薬があるという点で1つ目と重複はするが、例えば骨髓異形成症候群、慢性骨髓性白血病、慢性リンパ性白血病、真性多血症など、専門的な診断・評価・ステージングが最初には必要でも、観察や治療などは地域の病院でも可能な場面が増えてきたように思う。低リスク骨髓異形成症候群へのアザシチジンなどは、化学療法をやっていて緊急採血ができるような医療機関ならば、常勤専門医が不在でも(サポートを受けながらであれば)外来で実施可能だし、例えば慢性骨髓性白血病や慢性リンパ性白血病などは、診断も治療も外来でできる。慢性リンパ性白血病なら骨髓穿刺なしでも診断できる。データの推移、血算のパターン、細胞表面マーカー解析を見ることは通常の血液検査で実施可能である。治療に用いられるBTK阻害薬も経口薬である。また、本書にはホスタマチニブのような新規薬への言及もあって、帯にある「最新情報のアップデート」は確かななされている。なおこれも経口薬である。

必ずしも都心部の大きな高次機関の血液内科外来に頻繁に通わなくても、あるいは入院しなくても、自分の家の近くで診断・治療が受けられる潜在性を示しつつあることを、私のような専門外の医者にも察することを可能にしている本書の役割は大きい。



●B6 変型/頁 516/2024 年
定価：4,950 円
(本体 4,500 円 + 税 10%)
[ISBN978-4-260-05434-8]
医学書院 刊